

東洋史研究

第三十卷第二・三合併號 昭和四十六年十二月發行

孫恩・盧循の亂について

宮川尚志

はじめに

西紀四・五世紀の交は中國では東晉から南朝宋への過渡期である。東晉の國初以來、江南に移住した中原出身の貴族の夢を驚かせた、五胡の侵入の脅威は太元八（三八三）年の淮肥の役で一應除かれた。江北における諸小國對立の狀態の再現は、太平眞君元（四四〇）年前後の北魏太武帝による統一まで半世紀あまりの間、江南の天地に小康狀態をもたらした。

江南の支配者は揚子江流域の開發に期待をかけ、祖先の地を回復するという悲願はようやく現實の政策から遊離し、新亭對泣の逸話のみを残した。南人・北人の對立は潛流となり残るが、官の高下・清濁の體制の中に兩者とも適當に組みこまれ、南人すなわち吳姓の寒門はそれぞれの才幹により政治・軍事の實權を獲る機會の可能性に不満をそらせた。

孝武帝の治世に幸輔として實權を握った皇弟、會稽王道子およびその世子元顯は、荊江の軍閥貴族を制しきれず、内亂あいつぐ中から、滕許の三吳の要地に、孫恩・盧循・徐道覆ら天師道を奉ずる徒黨の反亂が勃發した。

この亂は後漢末の黃巾の亂に比して、時間的にははるかに長く、空間的にも前者が江北を主としたのに對し、揚子江以

南、華南海岸線に至る全地に及んでおり、充分これに匹敵しうる。兩者がともに道教徒により指導されたことについて、佛教側の護教文獻は口を極めてその反體制的、不法性を論じている。弘明集八・玄光の辯惑論に「東吳遭水仙之厄。西夷載鬼卒之名」とあり、廣弘明集八・辨惑篇に載せる道安の二教論では服法非老第九に、「或挾道作亂（以下挾注）。黃巾鬼道、毒流漢室。孫恩求仙、禍延黃晉。破國害民、惑亂天下」といい、同九、甄鸞の笑道論には「三張詭惑於西梁。孫恩擾擾於東越」といい、同一、唐の傅奕の「上廢省佛僧事」にも、「孫恩習仙而敗晉、道育醜祭因而禍宋、于吉行禁殆以危吳、公旗學仙而誅家、陳瑞習道而滅族」と述べるように、孫恩等の亂は他の同類の亂と必ず並稱されている。^①

黃巾の亂および蜀の三張の宗教王國については近年、太平經・老子想爾注の研究が開發され、その反亂の宗教的連關がようやく明らかにされつつある。孫恩の亂については、彼の家が世々五斗米道を奉じたこと、彼の叔父、秦が錢唐の杜子恭（名は炆）に師事し、その祕術（内術）を受け、のちまた養性の方を知り、道術を以て土庶を眩惑したことが述べられるほか、特に彼が所依とした道經が何かはつきりしない。秦は死んだが、信者から蟬脫登仙したと信ぜられた。また秦の後をつぎ叛軍をひきいて孫恩に従った婦女らが戰爭の足手まといになる嬰兒を水に投げこみ、「汝の先ず仙堂に登るを賀す。我、後を尋ねて汝に就かん」と言ったという、晉書一〇〇・孫恩傳および魏書九六・司馬叡傳の記述により、叛徒の狂信ぶりが分かるが、これとて孫恩一黨の道教信仰の内容を具體的に示してくれない。

黃巾の亂がはたして被壓迫階級の抵抗として全面的に理解できるかという疑問は、太平經の所説の評価とあいまち、中國史家によりかつて論ぜられた。^②孫恩の亂の社會的性格についても、これをもって農民戰爭（いわゆる起義）と見るか、統治階級の内部の鬭争にすぎないかが、朱大渭・曹永年兩氏等により取り上げられた。^③朱大渭は要するにこの亂の效果として東晉の權門士族が大打撃を受け、劉裕の創立した宋において寒門庶族が登場したが、叛亂の威力に動かされ、改革の施策を執り、社會生産力を發展する道を開いたことが肯定できるというに止まる。それはあたかも黃巾の亂後、曹操政權の擡頭となり、いくたの新しい政策が實施されたことと比較されるので、それだけのことなら、一應肯定されるものの、

叛亂の真相を深く照しだしたとは言えない。

我國において孫恩の亂を扱った專論は寡聞にして知らない。また前掲の論文でも叛亂の詳細な経過や、その性格を推察する手掛になる一見些細な事項についてまで言及していない。歐米ではアイヒホルン氏の勞作が唯一であろう。^④この亂に直接間接觸れる史料はかなり多く散布しているのので、この機會において孫恩・盧循の亂の史料の長編を作るのは望ましいが、紙面が許さない。ここに爲しうることは從來の研究を顧みつつ、新しい開拓の經路を求めることである。

さて朱大渭氏の論文は「孫恩徐道覆起義的性質及其歴史作用」と題しており、この亂の重要人物である盧循を省いている。その理由は論文中にとわっているが、盧循は階級意識鮮明ならず、敵將劉裕から征虜將軍・廣州刺史・平越中郎將の官號を受けたりしたが、その部將であった徐道覆は鬪争を堅持する行動に終始し、義軍を指揮する功績が盧循に超過するからであるというに在る。^⑤

さて宋の袁樞の通鑑紀事本末の卷一七には盧循之亂の項目あり、孫泰に始まるこの叛亂の顛末をまとめている。事實上孫恩が元興元（四〇二）年戦死ののち、九年にわたり叛亂軍を指揮したのは盧循であり、徐道覆は戰略・戰術上たしかに彼に批判的であつたが終始彼に従つていた。盧循は最後には交州の龍編（ハノイ）で刺史杜慧度と戦い敗れて、投水して死んだ。^⑥彼の父や同黨は捕斬された。盧氏一門は最後まで降服はしなかつたのである。歴史上の人物の評價に先立ち歴史家のなすべきことは事實の價値關係を明らかにすることである。私はこの亂を孫恩・盧循の亂とよぶが、まず盧循に焦點をあてて、いまだ明白にされない點を取り上げて見たく思う。

一 盧循の出身

孫恩が琅邪の人、孫秀の族であり、この孫秀は西晉の趙王倫の近吏小職を務め、その亂の謀主となり、王の封地に轉籍した寒門である。琅邪の名門王衍は孫秀の郷議に品してほしいとの願いを却けようとしたが、従兄の王戎の勧めで郷品を

與えて仕官の途を開いてやった。おかげで彼が權勢を振ったとき王氏一門は難に遭わなかったといわれる。

この寒門の孫恩と婚姻を結んだ盧循は范陽・涿（河北）の名族である。故陳寅恪氏はその名著「天師道與濱海地域之關係」で、兩者の通婚は天師道信仰を共にしたことを考えねば理解できないと述べる。その通りであろうが、もうすこし立ち入って盧氏の家系をたどって見よう。

劉備の師でもあった後漢末の大儒、盧植（一一九二）が盧氏繁榮の源を開いた人である。彼の子、魏の司空、毓、その子、欽（一二七八、晉書四四）、その子、浮と三代、儒業を以て知られる。欽は清貧を稱せられたが、もとより盧氏は官界に名聲を築いていた。しかし西晉末の政局混亂とそれにつづく永嘉の喪亂とがこの名門にも暗い影を投じてきた。

欽の弟、斑の子、志は八王の一人、成都王穎の謀主となり、趙王を敗つたのち、成都王を齊王と連合させた。王の本據の鄭に、一時、惠帝を迎えたが、反對勢力が強くなり、洛陽に行幸するようにした。成都王の母、程太妃はこれを欲しなかつたが、信ずる道士、黃聖人が酒杯をなげうち占つて遷幸を促がすに及びこれに従つた。盧志は惠帝の信任をも博し、成都王失脚後も洛陽にいた。匈奴の劉聰の迫るに及び、劉琨をたよつて并州に赴いたが、匈奴の劉粲のため殺された。志の子、謙（二八四—三五〇）が劉琨の參謀となり、彼の死後、石虎の趙に仕え中書監となつたのはこうした運命の結果である。

平穩な儒者官僚の生活に安んじたであらう盧氏一門は、志・謙二代の間に、政局の焦點に當り、道士とも接近し、夷狄の國に投ぜざるを得なくなつた。その謙も石虎死後の冉閔の亂で殺された。彼は「清敏にして理思あり、老莊を好み、善く文を屬」と評せられるが、西晉の官界でその風尚に染んだためもあらう。彼は石虎に仕えたことを終世恥とし、諸子に訓戒し、「晉の司空從事中郎」とのみ稱せよと言つた。

彼とともに石趙に仕えて大官に至つた漢人十餘人の中に、清河の崔悅がある。彼は劉琨の妻の姪に當り、琨の妻は謙の從母になる。つまり劉琨・盧志とともに崔氏姉妹を娶つたわけである。謙は書道に長じ鍾繇を學び、悅は衛瓘の書法を學

び、かつ索靖の草書を習った。老莊を好んだり書道を習うことは一般に貴族の教養で異とすることはないが、二人を比べるときさらに共通点がある。悦の孫、玄伯は諶の孫女を娶り、太武帝の宰相、崔浩を生んだ^⑧。そして盧循が諶の曾孫に當ることは、魏志三二・盧毓傳注引、諶別傳および晉書の盧循傳に明記している。

二人は心ならずも胡族の朝廷に仕えた。とくに石虎一門は佛圖澄を尊信し、版圖内を西戎の教になびかせた君主である。中國的教養を積み、民族の非運を體驗した崔・盧の貴公子にとって、個人の命運を託しうるとともに、民族的色彩を缺いてはいない宗教を求める心が芽ばえなかったであろうか。むろん諶・悦ともに道教と關係あつたことは何も立證できない。ただ系圖をたどれば、晉室の干城であつた劉琨とともに艱難を共にした盧諶の曾孫に、北に崔浩あり寇天師の教を確立させ、南に盧循あり天師道の領袖となつたことは明示されている。

盧諶の子孫は南渡したはずである。循の父は緬といい、循と行動を共にし、交州で斬られた。高僧傳四・慧遠傳に、緬は慧遠と同じく書生であつたという。慧遠は年十三にして石虎治下の許・洛に學び、二十一歳のとき大行恒山の道安の門を叩いた。緬はおそらく諶の子でやはり石虎に仕えた其の父の命で就學したのであろう。諶には五子あり、元和姓纂にその名が見え、長子勛は南祖、第四子の偃は北祖と號すと記す。偃は慕容燕國に仕え、その子の女、孫の度世は北魏で名を顯わした。緬の父は南祖勛であろうか。または勛とともに南渡した兄弟、つまり、二子の凝、三子の融、五子の微の三人中のどれかなのか。^⑩

そうしたせんさくよりも指摘すべきことは、中朝・江北の名門であつた盧氏も南北に分居し、南渡の時期も晚れたため、東晉の領域に住みついた循の父たちも、江南の貴族社會では歓迎されなかつたであろうということである。

慧遠と盧循との關係はどうか。藝文類聚八七に、循から南方産の果實、益智(龍眼肉)を贈られたのに答えた慧遠の書を載せている。「慧遠研究」の編者は、この書の年代を義熙元(四〇五)年と推測する^⑪。なお晉書の循の傳には「沙門慧遠、鑑裁あり、見てこれに謂いて曰く、『君の體は風素に涉るといへども志は不軌に存す』と(言つた)」という。これは

循の弱年のことらしい。嘏・循父子の卒年は義熙七(四二一)年であるが生年は判らない。きめようとしても仕方ないが、慧遠(三三四—四一六)と嘏とかりに同年とすると、嘏は三三四年生れ、その祖父の諱は二八四年生れだから、嘏の父の生年はその中を取れば三〇九年、循を父の二五歳の時の子と假定すれば三五八年になる。慧遠は三六五年、道安に従い湖北の襄陽に來て、三八一年、羅浮山行きをあきらめ江西の潯陽に住み、三八六年になり廬山東林寺に入った。循(三五八?—四二一)を慧遠が評論したのは三八一年前後と見れば循の二十餘歳のことであり、その後、循は寒門の孫恩の妹を娶つた。しかしこの時、盧循の家もまた寒門とよばれる要素を備えていた。過江(南渡)の時期がおくれたこと、晉人にとり憎むべき舊敵國石趙の官僚の子ということ、宗族の團結が南北に分れて弱くなっていること、などである。彼は雙の眸が光ってすぎ透り、腫がくるくる回轉したし、草隸・弈碁の藝を善くしたと記される。西晉貴族の子孫ながら、貴族の常道から外れてゆく危険は慧遠ならずとも豫想しえたであらう。

江北に留まった盧氏は北魏の朝廷で顯達したが、力を待み自立を策した者もいる。盧玄(度世の父。魏書四七)の從祖兄、溥は道武帝の河間(河北省)太守であったが、天興二年(三九九)七月、郷部を總攝し海濱に屯し、使持節征北大將軍幽州刺史と稱し、郡縣を攻掠した。列傳の方には彼の自立の時期を後燕の慕容寶(隆安二年五月弒)の末年とするから、その一、二年前から叛旗を掲げたものであらう。ときに道武帝は北は高車を討ち東は後燕の中心都市中山・鄴に壓迫を加えていた。寶に代った盛は慕容燕國の存立を計り努力した。溥が幽州刺史と稱したのも、燕の支持である^⑧。この年四月にはやはり魏に従つて清河太守をした傅世も千餘家の黨を集め撫軍將軍と稱し五月に魏の討伐をうけ亡んだ。しかし溥は魏の幽州刺史封沓干を殺した。同年十二月、魏將、和突の討伐を受け、三年(四〇〇)正月、遼西で敗れ、その子、煥とともに捕われ平城に送られ刑せられた。慕容氏が勢力を扶植した東部華北の平原はついに魏の領土となるべき運命にあった。列傳によると、溥は起兵の前にその郷姻諸祖十餘人を殺している。また魏軍と戦っていたころ附近の豪族や燕の地方官で魏に内屬する者があいついだ。おそらく華北の漢人豪族にとって去就に迷うところがあったらしい。盧溥の叛した天興二年は

東晉の隆安三年であり、孫恩起事と同年である。

さて盧循の家門の背景は以上のような性格・思想の人であったか。一言にしていえば彼はより士大夫的な人であった。彼は孫恩が人士を殺そうとするのをつねに諫止した。元興二(四〇三)年、彼は劉裕に追われ番禺(廣東)に海路を経て走った。續晉陽秋(御覽二八〇引)によると、廣州では珍らしい麪が手に入ると、彼は文武の臣下に分配し、皆に行きわたるまで自らは食べなかった。「其仁如此」とほめられている。けだし盧循も望郷の念やみがたかったであろう。しかし強敵劉裕を相手に決戦をいどむ覚悟は容易につかなかった。のち彼に北伐を強く勧めた徐道覆もはじめ慎重であった。「本より嶺外に住む。あに理ここに極まらんや。正に劉公のともに敵としがたきゆえなり」と言った。しかし北伐は二人の共通の願いであった。ただ徐が舟艦建造のための船材を南康(江西・南康縣)の山中に巧妙な計で備蓄したり、劉裕の南燕征伐の長引くとき時間をかせごうとしたような戦略家であったのに對して、盧循はむしろ政略家であった。廣州においても彼は士大夫勢力との連合を計るにつとめた。

その一例としては王誕(宋書五二、三七五―四一三)・吳隱之(晉書九〇。?―四一三)がある、琅邪の王誕は司馬元顯に親任されたため桓玄が權力を得ると危うく死を免かれ廣州に流された。盧循は元興三(四〇四)年冬、刺史吳隱之の守る南海郡を陥れ、彼を執えた。一方、王誕を平南府長史とし賓禮した。しかし盧循は結局こうした名族や忠實な官僚の協力を獲るのに失敗し、二人とも劉裕の指圖で都に還った。つまり盧循の悲劇は名族・官僚に結ぼうとしても信ぜられなかったことにある。

二 郁洲について

盧溥の反と孫恩・盧循の反とは時期を同じうするが關係あつたかどうか判らない。ただ兩者の關係を推測する根據になるかどうかは別として、孫恩・盧循の亂を考察するに當りきわめて注目に値するのは、彼らが有力な水軍を擁し、長江で

ルタ沿岸から廣東・越南にかけて機動を行なっているほか、海島とくに郁洲（鬱洲）をその根據地として、作戰・補給の基地としていたことである。^④

越王句踐（前四九六―四六五在位）は晩年の周の貞定王の元年（四六八）瑯琊（琅邪）に都を徙し、その死後の安王二三年に、吳（蘇州）に遷都するまで越はこの地で樓船・戈船の水軍を建設した。軍事のほか當然、浙江の本據との平時の交通はほとんど海路を利用したと思われる。^⑤ また琅邪は齊北方に特有な信仰で神仙説を懐胎するに至る神祕思想と祭祀の中心でもあったことが注意される。神仙説と海洋航海術との奇妙に見える結合は後世の道教の性格に尾を引いている。越にはまた古來特有な巫術があり、越祝などと呼ばれたが、「禁」という呪術を行なったのが特色で、この宗教呪術的風土が三國の吳や東晉のころ北方系の道教がこの地域に移植されたときそれと合體し、道士の行う修法に影響したと考えられる。^⑥ そもそも古代の齊の宗教習俗が、始封者太公望の出身を通じて西戎である氐羌のそれと交流したものであるとの假説が提起されているが、古代から中世への過渡期にかけて三張の天師道は西方山岳地帯において氐羌に信者を持っていた。孫恩の信奉者は東方沿海地域に多かったが、遠く戰國の齊・吳・越に共通する宗教習俗の土壤の中に育まれたものと言えよう。^⑦

郁洲は、山東に近接する江蘇省北部、連雲市の南、今は陸つづきになったが、昔は海島であった雲臺山である。漢の高祖を避けた齊の義士、田横がその徒と住んだいわゆる田横島は青島市の東、勞山灣東北に今も名を残すが、史記正義等は東海縣の沖にありとし、後代の地理書も多くは郁洲に比定している。

北宋の歐陽忞の輿地廣記二〇・淮南東路の條に、「〔東海〕縣は鬱洲に治す。四面、海を環らす。」とあるから、政和年間まだ郁洲は海島であった。なお田横の據った島であるとし、一名蒼梧山と記している。^⑧ なお本書に先立つ十世紀末の樂史「太平寰宇記」二二・海州の條に詳しい地誌を述べている。

北宋のとき、海州は胸山縣（すなわち漢の胸縣で、始皇帝が海上に「秦東門關」であることを表示した石を立てた所）、

東海縣（漢の贛榆縣、懷仁縣（同上）沅陽縣（後漢の厚邱、宋の僮縣）の四縣から成っていた。楊守敬「水經注圖」でも分るように、山東半島南岸から江蘇省の淮水河口にかけた彎曲した海岸線は、瑯琊海曲と呼ばれ縣名にもなった。王莽の天鳳四（西紀一七）年にこの地の庶民の婦、呂母が官吏を恨み、客、數十人とともに海中に入り亡命數千を招き合した。縣令を殺した海中に還り、呂母固とのちに呼ばれた壘を築いた。^⑤實宇記はこの項の次に田横固のことを記す。東海縣の東北六十一里の小兩山の南にあり、孤峯特秀し、三面壁立し、俯して深溪に臨む。ただ東隅のみ歩行できるが、石を累にて城としたとある。また東海縣東二十八里、南は胸山縣界、北は懷仁縣界にわたり、廣さ二十餘里の大海（すなわち濶入部）がある。七月にこの海を渡るの危険であり、公事でやむないときは祭をして免かれた。元中記にいう東海の惡焦（山名）は縣東面にあり、方三萬里、海水これに灌ぐとすぐ消える。ゆえに水が東南に流布しても海が一杯にならないと述べる。これは莊子にも見える歸墟の傳説の殘存である。さらに實宇記には郁洲島上、牛欄村は三國蜀の財政家、粟竺の放牧の處だといひ、島人はみな粟家の隸であると傳え言われ、粟郎と呼ばれる粟竺の神靈が祭祀され、婦を取る者はまず神に捧げないとたたりがあるといふ。^⑥

郁洲を中心にして黃海沿岸の地誌を見てゆくと、古來、傳説に恵まれたこの地が南北の交通の要衝でもあり、大陸の戰亂を避ける適地であったことが分る。郁洲には宋の泰始七（四七二）年、鬱縣が置かれた。この島はもと贛榆縣に屬し、この縣は前漢では琅邪郡、後漢西晉以後東海郡に屬し、この郡は徐州に屬した。後漢のときには東海の郟縣が州治であったが三國魏以後、彭城に移治した。宋の明帝のとき淮北が魏に奪われ、青・冀二州がこの縣に共治したことがある。郁洲はそれ自身の地理的特性のみか、道教の中心地である琅邪・彭城に續き、また晉の南渡以後、道教が勢力を延ばした會稽・三吳とも連絡がある。さらに晉宋間の流民の移動徑路に近く、反亂の巢窟となる絶好の要件を具えていた。要害の地であるとともに、相當な人口を養うべく、淮水兩岸の背後地から資給を受け得る地として、單に海島とかまたは海に入ると言えばこの地を指すことが多かったと思われる。^⑦

赤眉の亂の動機となつた呂母の徒黨が海島に據つたことは既に述べた。後漢中葉以後、朝廷は西は羌族、北は鮮卑の入寇に苦しんだが、その他、全國にわたる内亂がつづいた。安帝の永初三（一〇九）年、海賊張伯路らが縁海の九郡を寇略し、侍御史龐雄は州郡の兵をひきい一旦これを降した。しかし翌年、張は平原の劉文河ら三百人と、使者と稱し、厭次（山東省富平縣）城を攻め、高唐（禹城縣）に轉入し囚人を解放した。張は部下の將軍と稱する渠帥らの朝謁を受けた。

御史中丞王宗は青州刺史法雄（後漢書六八、列傳）と、幽冀の兵をひきい討伐し、賊は斬首され溺死する者、數萬人あつた。朝廷は大赦を命じたが賊軍は武装を解かなかつた。法雄は「賊がもし船に乗り海に浮び、深く遠島に入らば、攻むること未だ易からず」と意見を述べた。彼の懷柔策が王宗に聽き入れられて、賊は一旦捕虜を還したが、この方針を守らなかつた東萊郡を避けた賊は遼東に遁走し海島の上に止まつた。永初五（一一一）年春、食に乏しくなりまた東萊を攻め、法雄に破られると遼東に還り、ついにこの地で平げられた。遼東・山東の二半島の間を、その中間の廟島列島傳いに行動することは當時の航海法から容易である。

これは北方水域で起つた例であるが、ついで順帝の陽嘉二（一三三）年、海賊曾旌らは會稽郡に寇し、句章・鄞・鄮の三縣の長を殺し、東郡都尉を攻めた。三月には揚州六郡の妖賊、章河らが四十九縣に寇した。つづいて三年（一三四）の九江の賊蔡伯流、漢安元（一四二）年に降服した廣陵の張嬰、同年八月に起兵した歷陽（安徽）を中心にした揚・徐の盜賊、范容・周生をはじめ、同年十一月の徐鳳・馬勉、十二月の黃虎はともに九江の賊である。その他、丹陽・廬江にも亂が起つたが、これら東南の反亂は多少とも水軍を有したと思われる。

桓帝の代にも、泰山・琅邪の公孫舉や、勃海の蓋登（太上皇帝と稱す）、それに吳の孫堅の初陣の功名になつた會稽の許昭、その父で越王を稱した許生の亂があつた。これら沿海地域が一わたり被害をうけたあとで、黃巾の亂が東部平原に、張修の亂が西部山岳地帯に起つたわけである。遺憾ながらこれら海賊と道教との關係は明瞭ではないが、道教分子の混入は推測に難くはない。

西晉時代については、前述した孫秀は趙王倫を奉ずる工作が危くなつたとき、船に乗り東に走り海に入ろうとした。北は廟島から郁洲に至り、浙江省の舟山列島まで、海賊が入れ代り立ち代り根據地として、彼ら共通の反朝廷の思考や信仰を空間的にも時間的にも廣めて行つたものと考えられる。

五胡時代になると、前秦の青州刺史、苻朗が、孟欽を尋ねて海島に入ったことがある。孟欽は洛陽の人で、左慈・劉根の術あり、百姓を惑わし集めた術士である。彼は長安で堅の命を受けた司隸校尉苻融（堅弟）により誅せられたが、旋風に化して飛び去り追手を逃れたといわれる。堅の末年また青州に現われたというので、同じ前秦の宗室であるが老莊を好んだ苻朗が、追捕か追求のためであろうか、郁洲まで尋ねたわけである。

次にいよいよ本題の孫恩の亂で郁洲が重要な意義を持つことを述べる。孫恩はその叔父の泰の一家が隆安二（三九八）年に誅せられたときひとり海に逃れた。泰の信者は泰の死を聞いたが、死んだのではなく蟬脱登仙したと信じ、海中に就き資給したと孫恩傳にいう。魏書司馬叡傳でも、「恩は海嶼に竄れ、妖黨これに惑う」とある。孫恩に先立ち道教徒の信仰を獲たのは孫泰であり、孫恩だけが郁洲に逃れたのだが、信者は泰もそこに居ると信じ、恩たちに物資を供給したのだから、このころは恩は全く泰のカリスマの蔭にかくれて勢力を養つたことになる。

孫恩は隆安三（三九九）年十一月甲寅、海上から、上虞、ついで會稽郡治を襲い内史の王凝之を殺し、一月の間に浙江の要地を占據した。彼の軍の中核は海島において従つた亡命百餘人であつたが、いまや兵力は數十萬にふくれあがつた。會稽において恩は自ら征東將軍と號し、その黨を長生人となづけ、宣語して己に異り同ぜざる者を誅殺し、乳幼兒にまで及んだという。宣語とは、どの神格であるか分らないが、それに祈請して神の語というものを自分が受け、部下を絶對的に服従させたものである。太平天國初期の東王楊秀清のしたことと同類である。いな、近い例をあげると趙王倫の亂のとき、孫秀は牙門の趙奉をして宣帝（司馬懿）の神語を爲さしめた。宣帝の廟が北芒山に立てられ、また別廟もあり、ここでは楊珍という者をして晝夜祈請させた。のちには仙人王喬の神仙書というものを作り趙王倫の祚の長きことを述べさせ

た。このように啓示を受ける神格が複数になって、全體の統制がみだれるのは太平天國においても見られた。孫恩の信じた神格は厳しく烈しい性格で、神の怒りにふれ、死者は十に七八といわれる。^⑤

十二月、東晉の朝政を掌握する司馬元顯の命で謝琰・劉牢之の二將が討伐に向った。會稽に本營を置いた孫恩も決戦の覺悟をして、軍中の婦人が携帶する嬰兒を水中に投ぜしめた。狂信者の母は、「汝の先ず仙堂に登るを賀す。我も當に後を尋ねて汝に就くべし」(私の赤ちゃん、おめでとう。さきに仙堂へ上れるのよ。お母さんもあとからきつと行きますよ) と叫んだ。

こうした情景は敗軍の末の事件のように思われるが、そうではなく將來の軍事行動を妨げないためであり、戦いの常とはいえ非情の極みであるが、それだけ宗教的動機が強かったともいえる。魏書では、「諸妖亂の家、婦女は尤も甚し。いまだ去るを得ざる者はみな嬰兒を盛飾し、これを水に投ず」という。

孫恩の最後につき、孫恩傳には、臨海太守辛景(昞)に討破され窮蹙した孫恩は乃ち海に赴いて自ら沈んだ、妖黨及び妓妾はこれを水仙といひ投水し從死する者百數という。宋書一・武帝紀も、「奔敗の後、徒旅漸く散じ、生獲になるのを恐れ水に投じて死んだ」とある。晉書安帝紀のみ、太守辛景がこれを斬ると、彼の勳功としている。盧循もその最後は自ら水に投じた。それに先立ち彼は妻子十餘人を毒殺し、また妓妾を召して、自分と一緒に自殺する者はないかと尋ねると一人のほかは死にたくないと答えた。彼は死を辭した者をみな毒殺してのち投水した。杜慧度が彼の尸を獲てこれを斬った。水に投じて死に、水仙に成るといふ信仰はこの叛亂の初期には強烈に存していたと思われる。盧循の父、蝦は捕われ斬られたが、循はもちろん父を同信の徒とすることも、投水を勧めることもできなかったのである。さて前述の孫恩傳の條下には、信徒の婦人たちは「囊籠に嬰兒を盛り水に投ず」と記され、盛の字義が違ってくる。死化粧した罪無き兒らは海中はるか郁洲の仙堂に生まれたのであろうか。

劉牢之は孫恩の最も恐れた將軍であり、部將の劉裕は最も功があった。孫恩は捕虜の男女二十萬口とともに逃走し、寶物や子女は道路に捨てた。官軍の將兵は寶物に目をくれて孫恩らがまた海島に逃れることを許した。^⑥

一年餘の雌伏ののち、隆安四(四〇〇)年四月、孫恩は浹口戍(定海縣南虎蹲山外)を襲い(安帝紀)また會稽郡の餘姚・上虞・邢浦(山陰北)各地を攻めた。先に孫恩が敗走したのち、朝廷は謝琰を後任の會稽内史とし、都督五郡諸軍事(新安・東陽・臨海・永嘉・會稽)を兼ねさせた。彼の都督區域に、錢塘江以南の浙江省海岸・山地諸郡が入っていることが注意される。謝琰の部下たちは、「賊は近くの海浦におり形勢を伺っている。自新の路を開いて歸順させるべきだ」と主張したが、肥水の戦勝を今なお誇る彼は肯かかず、やがて會稽郡治は再び攻略され、謝琰はその本傳に従えば自らの帳下都督張猛に乘馬を斬られて戦死した。

朝廷は冠軍將軍東海太守・桓不才、寧朔將軍・廣陵相高雅之らをして長江や海岸を警備させた。孫恩は水軍を利用し、南は永嘉・臨海を破る一方で、餘姚・山陰で高雅之と戦い、劉牢之の進撃と見ると、海上に出で、扈瀆を攻め、内史袁山松を殺した。また長江をさかのぼり京口を襲うた。戦士十萬、牢之はまだ山陰に陣し間に合わないが、劉裕は蒜山(鎮江西南)で勝利を得た。しかし孫恩が船に歸り建康を衝く危険は何ともできなかった。逆風のため孫恩の水軍は白石・新洲(京口の西)あたりで引きかえした。すでに建康は司馬尙之の精銳が守っていたためもあろう。

この時、盧循は別將として廣陵を襲い虜掠するところあった。しかし孫・盧ともに海に浮び郁洲に歸った。高雅之は郁洲を攻めたが捕虜になった。しかしこの時になり始めて官軍は反亂の本據を衝いたわけである。したがって盧循が代ってもこの地は放棄してしまつた。八月、下邳太守に任ぜられた劉裕は郁洲で累戦し、孫恩を大破し、これから賊勢は衰弱した。海にそつて南に走り、十一月再び滬瀆・海鹽で戦つたが、劉裕に破られ、ついに浹口から遠くのがれて海に入った。

一時は首都を脅威し、司馬道子をして蔣侯神に祈願するほかなからしめた孫恩の強盛は、ついに野心に満ちた軍閥桓玄をして、翌元興元(四〇二)年三月道子・元顯父子を除かしめ、東晉の朝政を専らにする機會をえしめた。この年この月、孫恩もついに最後の期がきた。その状況は先に述べたとおりである。

三 孫恩と貴族・豪族

孫恩と盧循とを比較すると、その性格の相異が指摘できる。その得意の時に二十萬を數えた孫恩の兵衆は、戦死、自溺また流離し傳賣されて、彼の最期の時にはわずか數千人といい、また戰爭で百姓數萬人が殺されたという。魏書はもつとも彼の慘忍を記す。賊軍では禁令が行われず、肆意に殺戮し、士庶の死者は計えるにたえなかつた。あるときは縣令を殺し鹽漬にしたその肉をその妻子に食わせ、肯かない者は支解した。驃騎長史の王平が死んでまだ葬られないとき、恩は棺をこわし屍を焚いて、その頭を以て穢器とした。これらは敵對した官僚・豪族に對する彼の殿しい態度だと辯解する者がある。

五斗米道の信徒であるはずの孫恩は同じ信仰を持つ王凝之と、もう一人、孔道を殺した。凝之は羲之の子で、その妻は謝奕の女、字を道蘊、名を韜といい、才辯あり清談を善くした。王氏も代々天師道を奉じ、凝之は敵襲に際し、靖室（道教の精舎）に入り請禱し、出てきて守備の策を説く寮佐らに、「大道（神格）に請うて鬼兵の援助を獲ることになったから、賊はひとりでに破れる」と言つて、空しく殺された話は有名である。魏書ではさらに詳しく彼の呪禱行爲をのべる。彼は道室にて稽顙し、跪いて呪説し、空中に指麾し、處分するもののごとくした。「鬼兵各數萬がすでに諸津要を固めてゐる」と官屬に答えた。恩の軍が接近してやつと現實に出兵を許したが、たちまち敗走し二泊の後、子とともに捕われ殺された。^⑩

夫人は夫らの死を知ると、婢に命じて肩輿に乗り、刃を抜き討つて出た。彼女も自ら賊數人を殺したが捕えられた。外孫の劉濤は數歳の子供であり、捕われ殺されようとした。彼女は孫恩に向かい、「事は王門（王氏一族）に在り。何ぞ他族に關せん。必ずそれかくの如くんば、むしろ先ず殺されん」と言い放つたので、さすがの孫恩も容を改め謝し、夫人も劉濤も共に助命した。^⑪

なぜ王氏一門がとくに敵視されたか。王氏は世々張氏五斗米道に仕えたという。羲之は久しく會稽内史であり、またこの土地を愛し、永和十一（三五五）年、職を去つてのちも、浙江の地に居た。病んで天師道の祭酒、杜（子）恭に命を請うたが五十餘日後、死んだことが御覽六六六引・太平經に見える（註^②参照）。

在官のときは東土の饑荒を救済し、賦役の軽減に努めた。軍興以來、征役と充運で徵發された人民が死亡・逃亡して、その補充を出させると、それがまた亡叛するといふ惡循環に苦しんだうえ、彼は死罪に充てる者を免じて長く兵役に充て、みなその家を移し京邑を實させようと考へた。「小人は、これは殺されるより重いと思ふかも知れないが、懲肅の効があり、適時の宜である」と彼は言う。彼の政策と同じことが隆安三（三九九）年、司馬元顯により實行された。

東土の諸郡の、奴を免じ客となした者を、樂屬と號し、京師に移至して兵役に充てる政策である。東土は大さわざになり、人は命にたえず、天下これに苦しみ、孫恩の亂の發起する近因になつたと晉書六四に記される。もししからば王羲之はもとより一流貴族であるが、浙江の人民を苦しめた元顯の政治に連るものとして、怨恨の的になつたと考えられる。

同信の徒でも社會經濟的・政治的立場の對立があればもとより殺し合ふに至る。孫恩の第一次會稽占領後、八郡を席卷したとき、三太守は殺され、同數が出奔し、太守以外の官爵ある者で害に遇つたのは孫恩傳に七名擧げられる^③。その中、中書郎孔道とあるのは、孫泰に敬事した黃門郎孔道と同一人なるべく、晉略（列傳三二）の著者清の周濟もこれを指摘している。陳寅恪氏は孔道とは南齊の道教信者、孔稚珪の祖、道隆であるまいかといふが、晉書七八・孔坦（一三七〇）傳の末に、「三子道民宣城内史、靜民散騎侍郎、福民太子洗馬、みな孫恩のために害せらる」とある道民ではあるまいか。孔福民も孔福（晉略襲）として孫恩傳に見える。唐太宗の諱の民を闕字にしたのであろう。

孫恩は地方官を多數殺害した代りに土豪などから補充を考えねばならなかつた。八郡はこの時、俱に起り、長吏を殺して叛應したといふ（註^④を見よ）。魏書では孫恩は平東將軍と自ら號し、人士に逼りて官屬となしたので、諸郡の妖惑はならびに守令を殺してこれに應じ、衆みな雲のごとく集まつたとある^⑤。

しかし有力な江南豪族の立場は微妙なものがあつた。その一例は宋書の沈約自序に、その家世を詳述している沈氏の場合である。東晉末、沈警は學行あり、家には千金の財あり、東南の豪士として知られた。仕進の意はなかつたが、王恭の參軍をやむなく引き受けたことがある。警は累世「事道」した家で、彼は錢唐の杜子恭に敬事したという。そして子恭の死後、孫泰・孫恩にも事えた。

警の子、穆夫は隆安三年孫恩の反するや、その前部參軍・振武將軍・餘姚令となつた。その年十二月二十八日、孫恩が劉牢之に破られたとき、官軍の輔國將軍高素のために山陰の回踵嶺で穆夫は同じく孫恩の署した吳郡太守陸瓌之・吳興太守丘厖とともに斬られ、彼らの首は建康に送られた。「事は隆安故事に見ゆ」と沈約は記し、この日は彼にとり家禍の日なので特に明記している。このとき警および穆夫の弟四人も害せられたが、穆夫の五子は無事であつた。警父子の厄はその家人沈預の密告によるものである。助かつた諸子は劉裕に仕え、とくに第三子の沈田子（三八三—四一八）はその命で孫處とともに盧循を追うて廣州で戦い功があつた。

田子の弟、林子（三八七—四二三）の生立ちは精彩ある筆致で語られている。十三で家禍に遭い祖母に慰められ、沈預に對する復讐の念に燃えつつも、國家の罪人である一家の惱を背負うて成長した彼は、まず兄たちと晝はかくれ夜に外出して、居宅を賣り、殺された父祖諸叔六人の喪葬を營んだ。沈預は勢強く富み、林子一家を滅ぼそうとたくらんでおり、東土は饑荒で子を易えて食うありさま、外は國の法網に迫られ内は強讎を畏れ、山草に沈伏するも投厝する所なき身の上であつた。

孫恩討伐の軍隊の略奪暴行が目には餘る中で、劉裕のみ軍規嚴正なのを見て、彼は涙ながらに窮情を訴え、妖賊に驅逼され、逆に従つたため官刑を受け、なお生きてゐるのは同宗の裏切者への仇討があるためだと告げた。國家の他に家族の自立性をも主張する彼の立場を理解した劉裕は、別船を用意し彼の家族を京口に移し宅を給した。年十八になつた彼は兄とともに東に還り、五月節日の集會の席で沈預の入門を皆殺しにし、父祖の墓に仇の首級を供え祭つた。

やがて劉裕に懇望され従軍するが、盧循が劉裕の南燕北伐のすきをねらい建康を攻めようとしたとき、沈林子と宗人の叔長に誘いをかけようとした。これはやはり天師道の關係であろうか。しかし林子の思想は宗教でなく國家に傾いた。林子はすぐ劉裕に告白し、告白しなかつた叔長は誅せられた。林子一家は京邑に移住し、彼は劉裕の部下として盧循の軍を江上の查浦・白石で迎撃し殊勳を立てた。

建康の朝廷や荊江軍閥の對立はもとより、宗族相互またはその内部の矛盾、北人貴族官僚と東土の豪族、豪族と一般人民、これらの關係はばらばらになり、官兵の貪欲と信徒の狂信、將軍たちの計略、飢荒をこえて生き續けようとする難民の生活力とが舞臺上にあつた。

孫恩はどれほど反體制的でありえたか。はじめ八郡が響應したとき、彼は部下に告げ、「天下また事なからん。まさに諸君と朝服して建康に至るべし」といった。彼は東晉を一時奪つた桓玄と同じような野心を持っていたことになる。劉牢之の軍が江に臨むや「浙江を割據し、句踐となるを失わず」と言い、やがて牢之が江を濟るや、「孤わね、（この自稱を用いたのに注意）走るを羞はづれず」と言い海に入った。

これは潤色めいた記述であるが、孫恩の構想には官僚制國家があつたと思われる。黄巾をはじめ多くの妖賊の號する官號は獨特なものがあつた。官僚制の擬態をもつて民衆を長服させようとしたかも知れないが、自ら官僚制の上層にのしあがり、官僚化をあこがれるというのではない。孫恩の場合、規模が大きいわりには自ら天子・皇帝などとは稱せず、現存の晉朝の下で權力を握ることを考へている。

官僚制のどの部分が孫恩に應援したかということ推察できる一例がある。吳興太守の謝邈は、孫恩の部將、胡粲・郗驃らに執えられ、降参せず兄弟一門ともに殺された。それは門下生の仇玄達の裏切による。晉書七八の彼の列傳によると、彼の正妻郗氏は妬心が強く、前からいる妾のことを怨み、離縁状を送つた。その文章は彼が讀むと婦人の書いたものらしくないので門下生の代作と疑い、仇玄達を斥けた。それを怒つて玄達は孫恩に投じ、彼一門を滅ぼしたのである。孫

恩や彼のひきいた反亂軍の社會的性格を知るためには、彼が受け繼いだ所の、孫泰の人物や集團の性格を調べねばならぬ。

四 杜子恭と孫泰

孫恩の亂の起源を求めるとき、孫泰の師である五斗米道の祭酒杜子恭の人物を検討せねばならない。この試みは早くアイヒホルン氏によりなされたが、遺憾なことに氏は唐の王懸河の三洞珠囊卷一に引く道學傳および宋の陳葆光の三洞群仙錄卷一（晉書等にもある瓜刀の逸話を記す）によって知られる杜ト字は子恭と、雲笈七籤一一・歷世神仙體道通鑑二二に詳しい記述のある吳國錢塘の明師杜ト、字は叔恭とを混同した。

杜ト Tu Ping（トはトに同じ）の傳記は兩書同等である。彼は字を叔恭トといひ後母に事えて至孝あり、任官せず、人鬼混亂する當世を歎き、餘杭の陳文字を師とし正一弟子となり、百姓を救治した。夜中、張鎮南（魯）が降り、諸の祕要方陽平治を授けた。それから彼は燒香し、百姓の三五世の禍福を見とおし、章書符水により驗を示した。十年の内に、操米戸（信者のことか）數萬になり、遠近の道俗の歸依をえた。また謝安が吳興太守のとき（三六〇年ごろ）、その位人臣を極めることを豫言し、陸納の瘡を治し、七十歳まで生きると告げた。桓温の枋頭の敗戦を、その前年（三六八年）に豫告した。肥水の戦のとき謝玄に向かい、「我、往くべからず、往けば必ず功なし。彼、來るべからず。來らば必ず覆敗せん」と勝負につき答えた。

簡文帝咸安二年（三七七）に前の廢帝の復位を謀るのを口實に、大道祭酒盧疎（悚）の事件が起こったが、トはこのとき桓温にその敗死を豫告した。また彼の家世は曾玄孫になり吾が福を得るといった。さらに自分の死後、わが法を假り大道を破る者が出るが、少時にして消滅すると言ひ、その言を函封し、妻馮氏にわたし、子孫の修徳自守を誡めた。隆安中、琅邪の孫泰が亂を起こしたとき、彼は毎日集會し樂を縱まにし、書吏をして凶具を買わせ、まもなく死んだ。道民（道

教信考・弟子らが彼のため碑を立て明師と諡した。

雲笈七籤一一卷は首に洞仙傳と題し、于吉以下、眞誥に出てくる仙眞等の傳記を集めている。その中の杜曷の傳を讀めば、この傳記の筆者は曷が家と國とに忠實な天師道徒であり、かりにも叛亂を計る分子とは立場を異にしたということを主張せんとしている。しからば孫泰は彼にとり鬼子であり、杜明師一家は彼との關係を迷惑に思つたはずである。洞仙傳の史料になつたのは、政府に恭順な天師道系の手になるものだろうか。

ところが孫泰のその後の行動をたどつてゆくと、杜子恭と同一人としか思えない杜炯という人名が出てきて、これは杜曷とちがひ任官したすえ亂を起こし誅せられたとある。この間の事情をどう説明すべきなのか。

孫泰については、字は敬遠といい、錢唐の杜子恭に師事し、子恭が死んでから、その術を傳えたとは孫恩傳に見える。子恭の術とはどんなものかという、孫恩傳では祕術、何法盛の晉中興書(書鈔一三三・御覽三四五)には内術と記すが、その實例として前者にいう。彼はかつて人からナイフ(瓜刀)を借り、返せといわれ「すぐ返す」と答えた。やがて持主が錢唐から約七〇キロの嘉興に旅行したとき、船中に躍り入つた魚の腹をさくと瓜刀が見つかった。靈驗というには空々しい話だが、後述するような民間信仰の背景がある。

孫泰は「浮狡にして小才あり」といわれた人で、「百姓を誑誘し、愚者は神のように敬し、みな財産を竭し子女を進めて以て福慶を祈る」という。アイヒホルン氏はその獨文の論文(四六七頁)でこれを以て張角や宋の方臘と比し、私有財産の缺除とみなし、張魯の王國も同様であつたらうと述べている。上に引いた文は簡單なため斷定できないが、孫・盧二人とも多くの妓妾を有した。

アイヒホルン氏の孫泰の師、杜子恭に關する誤つた理解は上文で正したとおりであるが、私も、記述を孫泰の師である彼の時期にさかのぼらさねばならない。杜子恭の名は南齊書五四・高逸・杜京産(四三三―九九)の傳に、彼の曾祖父として見える。

○子恭—運劉毅術—道鞠揚州—京産—極

京産は顧歡の親友であり、また元の張天雨の玄品録（洞神・當上・五五八冊。卷三）には道儒に分類されるが、彼の家は少くとも右に掲げた五代にわたり五斗米道を傳えた吳郡・錢唐の士族である。彼の曾祖父、子恭の名である吳の字は梗韻（ひかる）と迴韻（あらわる、人身の元氣）と二つの訓があるが、ほかに炯（炯はこの俗字）の字があり迴韻に屬し、節操がかたいことを指す。名字相應の原則からいい、杜炆の字、子恭はこうして連絡がつく。

道學傳（三洞珠囊引）によると、彼はまさに正統の天師道の治頭（祭酒）である。

壯なるに及び、識信精勤、正一に宗事す。少くして天師の治録に參り、之を以て化導し、接濟周普なり。己を行ふこと精潔、虚心に物を拯ひ、信施を求めず。つひに治靜を立て廣く救護を宣べ、立ちどころに驗あらざるはなし。

前掲の瓜刀についての奇跡は天師道というより祠廟の巫祝の術であるらしい。アイヒホルン氏も注意したが、搜神記卷四に、宮亭湖（鄱陽湖）の孤石廟の下の二女子が、同様の術を有した話を載せる。彼女らは通りすがりの估客に「都で絲履を買ってきてくれたら厚く報いよう」と言った。估客は言われたように買物して、自分の用に買った書刀とともに箱に入れ、絲履を彼女に贈ったとき、一緒に廟中に置き忘れた。河の中流になると、ふと鯉が船内に跳び入りその腹を破ると書刀がでてきたという。これでどの位、厚く報いたことになるのか。しかし子恭のように借りた物を返さず、持主の拾得物で清算する祕術よりはましである。しかしこの話は本来の民間信仰の變形である。

右のほかに同巻にやはり宮亭廟の神が、參詣者の犀角でつくった簪を一時借用し、「お前が石頭城に着くころ返す」と言った話が見える。この人は吳の孫權にこのかんざしを獻上するよう命ぜられた吏人であるが、死罪覺悟でいたのに、果して大鯉魚、長さ三尺のものが舟に躍り入り、かんざしを取り戻した。

揚子江の舟運にたよる商旅にとり、宮亭湖廟神は靈驗あらたかな神であり、旅人は品物を湖中に投じ禮物としたことがやはり同巻の廬陵の人、歐明の話でも分る。この信仰・習俗が三吳にまで及んでいたので、子恭の祕術は民間信仰では神

への捧げ物である品を、天師道法の力により取り返すことに外ならない。巫祝道と同じような實修をしながら子恭と天師道徒は巫祝道とは協調するというより、それを押しつけようとすると面があった。道學傳の佚文のもう一つによると、「人となり善く治病し、人間の善惡、みな能く預め観る」とあり、つづいていう。

上虞（浙江）の龍稚、錢唐の斯神は巫覡をなし、昴の道王（法？）を嫉み、つねに誘いあい非難した。彼は「正法を非毀せば冥考を尋ね招く」と言っていたが、急に彼らの家に病氣がでた。しかし彼らは思過歸誠し、彼の解謝により治癒した。斯神はのちまた病にかかったが、昴は「汝は鬼物を藏するゆえに氣が祟るのみ」と言った。病人はざんげして、「實は好衣一箱を藏している」と。すぐにそれを天師治において焼いたところ、病が治った。

杜子恭の宗教的醫療活動は民衆のほか、貴族層にも及び、彼の活動期間を推定させてくれる。王羲之（三二一—二七九）の病のため請われた彼はその不治を弟子に告げ、十餘日後、羲之は死んだ。陸納（玩の子。晉書七七。三三六—九五）は年四十のとき（三六五）瘡を患った際、子恭に告げ、「わが家は代々短壽で、臨終にはみなこの瘡にかかる」と言った。子恭はために奏章し、靈飛散（水銀劑）を與えて、「厄命はすでに過ぎた。七十歳まで生きられる」と言い、その通りになった。道學傳では彼は四十歳で尙書令であった時のこととするが、じつは陸納は太元十四年（三八九）から死ぬ同二十年までこの職に在った。御覽六六六引・太平經にもこの事を記すが、四十で尙書令とは言わない。これに拘泥しないなら、子恭の治病活動は三六五—七九の期間またはそれ以後にわたる。陸玩は咸和六（三三〇）年、年六十に盈ち尙書令となり、六十四歳で死んだ（推定生卒、二七〇—三三三）。納には長生という名の子があったが疾あり、長生しなかった。しかしこんなことで陸納一門は道教に投じたかも知れない。

いま一つ、注目されてきた史料は宋の劉敬叔の「異苑」七や梁の鍾嶸の詩品に見える謝靈運（三八五—四三三）の逸話である。彼の父、謝琰（玄の子）が若死したので、「その家は子孫の得難きを以て」生まれたばかりの靈運を杜治（杜氏の治）に送り、病魔を避けさせた。彼は十五歳まで錢塘の杜治にいたので客兒と名けられた。初め錢塘の杜明師が夜夢みて、東

南に人あり來りてその館に入ったが、その夕、靈運は會稽で生まれた、旬日にして祖父の謝玄（三四三—三八八）も亡んだ、ゆえに彼を杜治に送ったとなつてゐる。謝玄の卒年はじつは三年後である。この杜明師とは晩年の子恭なのであろうか。しかし謝靈運が十五歳のときは隆安三（三九九）年で、すでに孫恩の亂の最中であり、後述するごとく、このとき子恭は在世しなかつた。子恭の死後も、杜治は宗教的機能を續けていたのであろう。子恭の子孫が無事に家學ないし家の宗教を傳えたのは、孫恩の亂にまきこまれなかつたからである。

なぜ杜治が安全だつたかと言へば、子恭の行法のうち、巫祝に起源する祕術・小術が孫泰に傳つたので、しかも孫泰が信用を博したのは杜治の出身で養性の方を知るところであつた。しかし杜炅と孫泰との關係については疑團が残つてゐる。

孫泰が百姓の信奉を集め、財産を積んでゐる様子を警戒した王珣は會稽王道子（晉書六四・三六四—四〇二）に言い、彼を廣州に流させた。しかし廣州刺史王懷之は孫泰を以て行鬱林太守としたので、南越もまた彼に歸依した。

吳廷燮の東晉方鎮年表によると、王懷之は孔汪に繼ぎ、太元十八・十九年、廣州に鎮した。琅邪の王導の孫である王珣（三五〇—四〇二）は謝玄と並び桓溫の幕僚であつた。謝氏との離婚問題で氣まづかつたが、謝安の死後、中央に戻り、殷仲堪・王恭らとともに孝武帝に近侍した。太原の王國寶が親任されるに及び、この二人は方鎮となり都を離れたが、彼は尙書左僕射に進んだ。太元十七年ごろであり、東海の王雅（三三四—四〇〇）が太子少傅になつたのもこの時である。

王雅は太元六年、孝武帝が宮中に佛法の精舍を立てたとき、表してそれを諫めたが聽かれなかつたと資治通鑑一〇四に特有史料が見える。彼は前から孫泰と親しく、泰は養性の方を知ると辯護し、召還に成功した。廣州から召還された孫泰は徐州刺史の道子により徐州主簿に任ぜられた。^④ その時期は太元十七年以後なるべく、道子はこの年十一月に琅邪王から會稽王に徙封された。孝武帝が崩じた太元二十一年まで、會稽王道子の專權がつづき、帝は政を怠り、宮廷の生活は亂れた。

道子が淮陵内史虞珽の子の妻、裴氏を側近に召したことが王恭傳(晉書八四)に見える。彼女は常に黃衣をきて狀は天師のごとく、服食の術あり、道子の賓客と談論した。これを退けんとした王恭は熱心な佛教信者で百姓を徴發して佛寺を修營させ壯麗にしようとする務め、士庶の怨みを買った人である。道子に信任されたのは太原の王國寶・王緒であり、王恭は彼らを除こうとしていた。國境に接し江北の流民が集居する京口・廣陵を中心に、孫泰はやはり道術を以て士庶を眩惑していた。そのことを道子は默認しており、官も輔國將軍・新安太守に移った。

安帝の隆安元年四月、王恭は兵を擧げ、王國寶を誅せんとした。道子は結局その望みに従い國寶を誅して一旦和解した。孫恩傳に、王恭の役に、孫泰が義兵數千を私に集め、國のため王恭を討たんとしたのは、翌隆安二年七月から九月までの第二回目の王恭の起兵を指すのであろう。

一體、孝武帝が道子の權限を制しようとして王恭(兖州)・殷仲堪(荊州)を方伯としたのであるが、道子は國寶の死後、宗室の譙王尚之兄弟を重用し、王恭に備えた。ここに至って王恭は殷仲堪・庾楷(豫州)・桓玄(廣州)らと連名し、建康政府を肅正しようとした。これに對して道子は、年十六歳になり明帝神武の風ありと稱された世子元顯を征虜將軍とし、王珣・謝琰・高素らをして王恭を討伐させた。しかし王恭の敗北は彼が爪牙とする劉牢之が高素の誘いにより彼をうらぎった爲である。牢之は精兵利器もろとも朝廷に歸順し、桓玄ら敵の援軍を都の外、新亭でくいとめた。道子傳では桓玄らが石頭に迫ると聞き、元顯は竹里戍(京口の南)から京都に馳せ還り、丹陽尹王愷・鄱陽太守桓放之ら五人の太守をして京邑を發せしめ、自ら指揮し、合計數萬人の兵で石頭を固めたというが、その中に新安(道子傳に章安とする)太守孫泰の名がある。危急の報にこれら太守は任地から一旦建康に赴いたのであろう。

孫恩傳にはこのころ、黃門部孔道・鄱陽太守桓放之・驃騎諮議の周勰らがみな彼に敬事し、元顯自らしばしば彼を訪ね秘術を求めていたという。つぎに、「泰は天下兵起るを見、晉祚まさに終らんとすとおもひ、百姓を扇動し、私かに徒衆を集む。三吳の士庶多くこれに従う」とあり、官軍の部將であつた彼が自立を計るに至る事情を記している。たしかに王

恭は牢之の子、敬宣により追捕されて刑死したが、桓玄・殷仲堪らは尋陽に退き、十月、桓玄を盟主として王恭の甲合戦にでた。孫泰自立の志はこのころ定まったであろう。

このとき前述した元顯の失政——東土豪族の奴客を發して兵となし、王羲之のように前秦を防ぐためではなく軍閥の内亂に備える強硬策が打ち出された。本來吳姓の據點であった浙東は東晉・南朝で北人中心の國家を支える地域となった。ここに叛亂がくりかえされる根本原因が存した。孫恩・盧循の亂を通じ、官軍は北府の主帥劉牢之、その偉大な後繼者劉裕により代表される。これに對し文字通り三吳の士庶が叛亂軍を構成した。むろん北方から避難し流寓した不平士族が加入したこともあろう。かつ孫恩らは東晉の官僚界に深く介入していた。孫泰が亂を起こしそうな氣配は多くの者が豫想したが、彼と元顯との親近のゆえにだれも告發しなかった。

孫泰は果して叛亂を遂行したのか。どうして死んだか。ここで晉書安帝紀の疑問の一節を検討せねばならない。隆安二年十二月己酉の條に、「前新安太守杜焜、京口に反す。會稽王世子元顯、討ちてこれを斬る」と見える。また孫恩傳にはつづいて「會稽内史謝輜、その謀を發す。道子これを誅す」とある。孫泰は隆安二年九月には新安太守であった。同年十二月まで在官したから、前新安太守杜焜はむろん彼の前任者である。杜焜の名は杜炅と同じく、杜子恭に外ならない。しかし正一の道法を百姓に授け、官僚と交際あつたにせよ自ら任官しそうにはない杜子恭が晩年に新安太守になったと思われない。それに杜焜と孫泰の死は同じ年月ごろと考えられる。

王恭の役に際しては新安太守として國家に盡した孫泰は、三吳の士庶の不滿と、東晉の政治を見かぎり叛亂を企圖した。これまで彼は「東土の豪家及び京邑の貴望」（宋書自序）の中に彼の師が獲得した信者を繼承し、民衆の困苦に直接關知しなかった。しかし東土の奴客の苦難を目撃し、それはまた奴客の主人たちの不滿でもあるが、孫泰は北人貴族の握る東晉朝廷への反感を抱くに至った。しかも彼はなお道子一派と接近したと思われたため、謝輜の告發までは無事であった。

一旦、孫泰の陰謀を知った道子政權は手速い處置に出た。なぜなら民衆の蜂起というより荊江軍閥を恐れたからである。彼は免官され「前新安太守」となり、起兵して杜烟の名において殺された。というのは孫泰は東土の豪族ならびに民衆雙方に宣傳するため、おそらくこのころ既に世を去った杜子恭の名を利用したのであろう。孫泰のしたことは穩健な杜明師教團にとつては分裂行動であつた。王凝一家も杜子恭教團そのものとは親近な關係に立っていたと思う。しかし今や教團から叛いた過激分子の軍事行動に對しては、大道に鬼兵を派せよと乞う外なかつた。天師道の同信の徒があいせめたというが、實は同じ教團の中の正統と異端との宗教戦争である。

當時杜子恭の教團のほかに茅山派はじめ各派の道教があつた。それは緩かではあつても道教としての一體感はすでに有していたと思う。このことと孫恩對王凝之の激突は矛盾しないことは上述の所で理解されよう。帛家道・李家道など一層民間信仰に近い道教諸派の存在は教團道教をさらに發展させるに役立つたと思われるふしがある。

孫恩の亂の前兆を看取り、また亂が起つてから避難し、これに係わり合わなかつた多くの道士・逸民がいる。一方では高僧傳一四・法意傳に見える朱應子のような道士がいる。原文を引くと、

晉義熙中鍾山祭酒朱應子。先是孫恩建議之黨。竄居此山、分其外地少許、與意爲寺。號曰延賢寺。後杯度去來此寺。云此處尋有諸變。後時當好……。

つまり建康の東郊、鍾山に孫恩に加擔した者が潛伏して、祭酒と號し、かつ所有地を佛寺に一部寄進し、平和裡に宗教活動をしていたことが分る。高僧傳が叛徒の一味を「建議の黨」とおそらく不用意に呼んだのが注意される。杯度もまた同書一卷に傳記のある神異僧で木杯に乗り水を渡ることから名づけられたように道佛混合した事蹟を記されている。

朱應子の名は異苑八にも見える。桓謙（晉書七四。前出。吳國內史のとき孫恩に追われ無錫に出奔した）が太元中（三七六—九六）大蟻の化した長さ寸餘の人馬に宅中を襲われたとき、蔣山道士朱應子が沸湯で殺し盡したが、桓謙も後に一門滅亡したという。

桓謙は桓沖の子で、のち姚興に投じさらに蜀の譙縱の署した荊州刺史となり、いまや劉裕を中心とする建康政府に戦いを挑んだが失敗した。譙縱は盧循と通じたといわれ、この叛亂の規模の大きいことが分る。しかしそれはもはや原初の宗教叛亂とは異ったものである。^⑤

おわりに

孫恩・盧循の亂は晉・宋過渡期の大事件というべく、その軍事行動は江北を除けば清末の太平天國の範圍を連想させる。當時の史料は軍事經過の記述はかなり豊かであるが、叛亂の性格を語る部分は少なく、また叛亂の社會經濟的原因と影響を具體的に推測すべき好適な記事も少い。斷片的にこの亂に係わる事實は分散しており、氣にかかりつつ本稿で言及しなかったものが多い。もとよりこれらの事情は本稿の缺陷を軽くするものではない。

註

① これらは反亂に關係した道教徒を擧げて非難している。公旗は張魯の字だが、誅家とは史實に合わない。陳瑞は西晉の咸寧三

(二七七)年、鬼道もて民を惑わし天師と稱した。嚴道育は宋の

元凶劭の亂に予った女巫で天師を氣取った。于吉は吳志裴注引江表傳に見える。しかし最初に記した玄光の辯惑論にはつづいて

「閩敷留種民之穢。漢葉感恩子之歌」とあるが、具體的に何を指すか不明。同論の後文に、「昔時軍標、張角黃符。子魯戴絳。盧

悚紫標。孫恩孤虛」とある。盧は東晉咸安二(三三二)年、海西公の復辟を謀った徐州の小吏、大道祭酒と號した。晉書及び廣弘

明集一一・明概「決對傳突廢佛僧寺」を參照。なお弘明集八・梁の劉勰の滅惑論に「是以張角李弘流漢季。盧循孫恩亂晉末」

とある。李弘については問題が多いが、海西公の太和五(二七〇)年に廣漢妖賊で李弘と稱した者の亂がある。

② 一九六〇年前後にわたり太平經を農民革命を基礎づけたとする侯外廬・楊寬・賀昌群に對し、疑議を挟む戎笙・熊德基の説が出た。吉岡義豐「太平經と佛教」(昭二〇・内野博士還歷記念東洋學論集所收)(注一)を見よ。

③ 朱大渭「孫恩徐道覆起義的性質及其歷史作用」(歷史論叢第一輯)、曹永年「試論東晉末年農民起義的變質」(歷史研究一九六五年二期)。なお後者の題名の漢字は日本通行字體に改めた。

④ Werner Eichhorn: Description of the rebellion of Sun En and earlier Taoist rebellions, Mitteilungen des Instituts

für Orientforschung, Berlin, Band II Heft 2, 1954. ibid. Nachträgliche Bemerkungen zum Auftrande des Sun En, op. cit., Heft 3. この論文への注意を促がされたことについてはアン・ザイデル博士、またその閱讀の便宜を與えられたことについて川勝義雄氏の好意によることを付記する。

⑤ このとき徐道覆は循の署する所の始興太守であり、反亂の最後までこの郡城を守ったが、彼の死は晉書十・安帝紀によると、義熙七年二月であり、右將軍劉裕（御覽二二八引・徐爰宋書には外に孟懷玉）に斬られ首を京師に傳えられた。彼は義熙六年二月、番禺に出てきて盧循に向かい、強敵劉裕が南燕の廣固城を攻略しない中に、何無忌・劉毅の徒を撃破せよ、と勸めた。一二年過ぎると都に還った劉裕が璽書をもって君（循）を徵することに成ろう。また自ら豫章まで攻めてくれれば防ぎようがない。こう言つてついに循を質成させ、嶺を過ぎて北伐させた。

彼は何無忌を豫章で敗死させ、循と共に、劉毅の軍を江陵桑落洲で大破した。この後で彼は建康を攻めよと主張し、荊江一州に據り持久の策に出んとした循を説き伏せたが、新亭・白石の戦では循の萬全の計に従わざるを得なかつた。彼は歎じて、「我ついに盧公の誤まる所となる。事必ず成らじ。我をして英雄となり、驅馳せしめば天下は定むるに足らず」と、循の多謀少決（この語は三國志では諸葛亮に適用されている）を批判した。劉裕すでに歸還出陣し、叛軍はついに敗走した。しかし循と道覆の差異は戰略論である。道覆が天下を定めんと言ったのは、かつて孫恩が一時の成功に喜び「諸君と朝服して建康に至るべし」と部下たちに言つたのと同様、帝王的野心の表現とも取れないことはい。

⑥ 宋書九二・良吏。南史七〇・循吏。南史は杜慶慶に作る。父の杜瑗（三二七—四一〇）は盧循がはじめ廣州に據り通好を求めたとき、その使者を斬つた。父の死の翌年、交州刺史の任を繼ぎ盧循の再占據の軍を破りその長史建之を捕えた。故九真太守李遜（反して瑗に斬られた）の子、奔・脫らが俚獠を部曲とし盧循の節度を受けてなお抵抗したのを討伐し、循の一族・部將らを斬つた。李脱の名は東晉初の道士の名と同じく、俚獠や交州在住者が盧循の信仰に同調したらしいことを推測させる。

⑦ 晉書四三・王戎傳。

⑧ 史語所集刊三・四冊（民國二二）

⑨ この黃聖人とは晉書九五・藝術傳の黃泓またはその父沈ではあるまいか。泓は父の沈から天文祕術を受け、永嘉の亂では慕容廆に投じた。

⑩ 魏書二四・崔玄伯（悅は玄伯の祖父）傳。

⑪ 同 四七・盧玄傳。盧氏の系圖は周嘉猷「南北史世系表」（二一—二十五史補編五冊一三七頁）を見よ。循の父の名については、宋書四九・孫處傳に「循父擬長史孫建之司馬虞庭夫」とある。

⑫ 木村英一『慧遠研究・遺文篇』（昭三五・創文社）四〇一頁。「盧循に答える書」註一。

⑬ 資治通鑑一一一。隆安三（天興二）年。

⑭ Etzschornの獨文論文（四六九—七〇頁）にもこの亂における海島の重要性を認めている。盧循は淮水流域に作戦し、孫恩本軍の長江方面の機動に策應したが、劉裕が賊軍の魔術的基地を壊滅したことが大きな打撃を與えたと言する。

⑮ 竹書紀年・吳越春秋などに見える。包遵彭「漢代樓船考」（中

華民國五六・臺北)の八二頁以下に詳しい。また同氏「中國海軍史」(民國五八・中華叢書編審委員會)上冊にも再録される。

⑮ 宮川「三國時代の道教史拾遺二則」(昭四四・福井博士頌壽紀念東洋文化論集)

⑯ 聞一多全集一・一五三頁「神仙考」。駒伯贊「論史前羌族與塔里木盆地諸種族的關係」同「吐番人種起源考」(中國史論集二冊、一九六九)。森安太郎「獄神考」(黃帝傳說—古代中國神話の研究所收。昭四五)

⑰ 水經注三〇・淮水の條に、郁山は蒼梧から徙ったから、山上に南方の草木があると傳えるのは輕視できない。廣西方面と航行が盛んであったことを推測させる。

⑱ 漢書九九下・王莽傳。後漢書四一・劉盆子傳には呂母は海曲縣(山東省日照縣西)の人というが、王先謙は海西(東海縣南)の誤とする。いづれにせよ、「海に入った」とは郁洲を指す。

⑲ 杉本直治郎・御手洗勝「神山傳說と歸墟傳說」(東方學論集一、昭二九)

⑳ これは今本の水經注に見えないが、楊守敏「水經注疏」ではもと存在したのが缺失したと註している。

㉑ 譚宗義「漢代國內陸路交通考」(民國五六・新亞研究所)一五五頁以下。東海琅邪道の條。東晉の廢帝、太和二(三六七)年、北中郎將の庾希(晉書七三。冰の子)は「罪あり走りて海に入る」と本紀八にあるが、列傳によると、「迷于海陵陂澤中」とあり、後に「聚衆於海濱。略漁人船、夜入京口」とある。

小方壺齋輿地叢鈔一七には郁洲(雲臺山)旅行記を三種收めてゐる。雲臺山記(漢軍姚陶、一七一〇)によると山は海中にあり

周り二百餘里、山下は險要で海州とあい掎角し、海嶼といわれると記す。遊雲臺山記(滿洲常安、一七四一)によると、舟行十里輿行四十里で山口に至ったといひ、下文に曰く「近二十年來海驛於山東北面百十里。皆爲陸地可耕作。非復昔時島嶼孤擲。陡絕於海中者矣。蓬萊水淺。東海且復揚塵。麻姑非妄語也」と、神仙傳

四・蔡經傳(王遠傳の續き)に、女仙麻姑が、「東海三たび桑田に成る」と世の變遷をのべた故事を引いて結言する。實に郁洲が古くから神仙道家に重視されたことを旁證する。また桃李が多いと記している。顧愷之の畫雲臺山記の山は四川ではなく郁洲かも知れない。つまり張陵がこの仙島に結びつけられたことになる。第三の「遊雲臺山北記」(山陽吳進、一七五五)には「前代、兵を避けし處、約三百人を潛むべし」とある。つまり一七二〇年、康熙末年から本島は陸つづきに成ったらしい。

㉒ 多田狹介「黃巾の亂前史」(東洋史研究二六の四)に後漢末の妖亂・反亂を列舉し、一〇〇—一八四年に四〇件を數えた。

㉓ 晉書九五・藝術傳。御覽九引・前秦錄では蓋欽とする。彼の死(風に化したという話)は西紀三三〇年ごろである。

㉔ 陳寅恪前掲論文(註⑧)に説あり。太平天國については、簡又文「太平天國典制通考」下冊(民國四七・九龍)一八一—二十篇、宗教考に詳しい。

㉕ 孫恩傳に、賊はみな倉廩を焼き邑屋を焚き木を刊り井を埋め財貨を虜掠したとある。これら財貨を持ったまま退走することになったので緣道に寶物を捨てた。官軍の方は、宋書一・武帝紀によると、「于時東伐諸帥御軍無律。士卒暴掠、甚爲百姓所苦。唯高祖法令明整。所至莫不親賴焉」というので兵士は貧しい。再び孫

恩傳を引くと、「時東土殷實。莫不饗麗盈目。牢之等遽於收斂。故恩復得逃海」という。

⑳ 晉書七九・謝安附。御覽三七六引・檀道鸞「續晉陽秋」には恩帳下都督とする。斟注は按語して「當從孫盛」(?)とするが、味方の裏切とも考えられ、のちに劉裕が左里の戦で張猛を捕え、琰の小子混に與えたところ、混は猛の肝を生食したという烈しい復仇行爲からすれば、琰の部下と見た方がむしろ相應する。

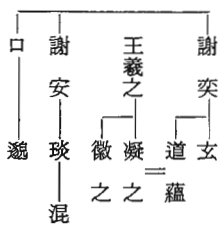
㉑ 晉書八三・袁瓌附。

㉒ 晉書三七・譙剛王遜附。敬王恬の子、忠王という。休之の兄。

㉓ 魏書九六・司馬叔傳による。盧循傳では孫恩の在世の時はただ循と通謀したと記し、恩の死後、元興二年の正月に東陽、八月に永嘉を攻め、劉裕に晉安まで追いつめられ海に浮び廣州に走ったという。高雅之は廣陵相であった。なお盧循との交戦については徐爰の宋書が史料を供する。

㉔ 晉書八〇・王羲之附。吉岡義豊博士(「道教經典史論」、二〇一頁)は彼の信仰は太上洞淵神呪經(道藏、始・制一七〇—三冊)の所説に似ると述べる。

㉕ 晉書九六・列女、王凝之妻謝氏。異苑六によると、彼女につづけて死亡した二男兒が忽ち現われて、罪があり鎮戒されていたが作福を爲して寛割させてほしいと頼んだので、功德に勤めたと記す。なお關係人物の系圖。



㉖

八郡	太守 (內史)	叛應者	後任太守
全稽	王凝之(死)	謝鍼	謝琰(死)
吳郡	桓謙(出)	陸瓌(誅)	袁山松(死)
吳興	謝邈(死)	丘廐(誅)	
義興	魏儻(出)	許允之	
臨海	新蔡王崇(出)	周胄	辛景
永嘉	謝逸(死)	張永	駱球(誅)
東陽			殷仲文(誅)
新安			

叛應者はおおむね孫恩の僞署する太守となった。

㉗ 孫恩傳には「畿内諸縣(魏書は丹陽と作る)處々蜂起」とあり通鑑にはこれに續けて、「恩黨亦有潛伏在建康者」とし、「人情危懼、常慮竊發。於是内外戒嚴」と記す。

㉘ 孫處字は季高。籍注に季高とあり字が世に行われた。宋書四九。(三四九—四一一)清の周濟「晉略」には列傳三五に田子・林子を掲げている。

㉙ 陳寅恪前掲。法苑珠林五五には彭城道士、魏書九六には徐州小吏の盧悚とする。杜弼がこれを非難したというのは彼の體制順應を示す。

㉚ 宮亭湖廟神は鄱陽湖を中心に、江南の經濟動脈であった揚子江を利用する商旅の上に大きな威光を有した。異苑にはこの廟神だけでなく湖や河の神はその支配水面の魚の捕獲を禁制したことを示す史料が散見する。卷五の梅姑(一に麻姑に作る)は、道術あり、履を着け水上を歩行したが、のち道法に負き増に殺され屍は

水中に投せられた。屍はのちに彼女の廟が立てられた丹陽縣湖側に漂着し、鈴下巫人により棺に納められた。梅姑の形は晦朔の日には水霧中に履をはいた姿で現われた。廟の左右で取魚射獵が禁ぜられ、犯すと迷徑没溺の患があった。巫は説明して、梅姑は傷死したから魚などが殘殺されるのを見たくないのだと。この禁止を解くには入漁料もしくは單に航行の安全保證金として旅人は何かの捧げ物を必要とした。ところが地方祠廟の信仰圈内に他所から侵入する道士はその道術によりこの禁制に挑戦する。捧げた瓜刀がまた見つかるという話はこの宗教葛藤を物語っている。

同卷に刻縣西郷の楊郎廟の話がある。一人あり先にこの廟に事えのち祭酒侯楮に就き大道に入らんと求め（道教徒になる）た者あり、誰郡の榎無隴なる者に遇い共に楮を訪れ神舎に至り神座器服を焼いた。無隴はこの時、一の扇を乞い受けた。歳を経て彼は乗馬の人から呼ばれた。「なぜ楊明府の扇を遺さないか」と。やがて彼は病死した。

卷六には劉聰の建元三（元年は三一五）年のこととして并州祭酒桓回が死者に會い死者の友人である生者の消息を尋ねられた話がある。晉代南北をとわず、天師道の教職者は祭酒と號し治を構えて傳道し、地方的祠廟信仰と係わり合いをもったのである。

④③ 南史二六・袁君正の傳に、彼が豫章内史のとき病にかかり、主簿の勸めで巫師萬世榮を招いたことを記す。巫は彼の着衣を信命（禮物）とし、北斗君に送ると言いながら自ら取ったので彼の人

め刑せられた。本文の話とは趣きを殊にするが、着衣が人命と深く關係あると信ぜられたことと、神に隠し衣服などを所有することが罪であるとの觀念があったことが知られる。

④④ 太平御覽六六六・道部八には、太平經曰として、嚴寄之以下陶弘景まで各人の十五條の逸事を引用する。史傳ではない太平經の本文のどこに記されていたかいぶかしい。王明の太平經合校（一九六〇・上海）七五八頁以下に説あり、道學傳を上文に引用しており、「又曰」とすべきを誤ったという。

④⑤ 晉書六五・王導傳附。珣の弟琅も謝氏の女を妻としたが、共に離婚した。

④⑥ 晉書六四・簡文三王傳。道子は安帝の初まで徐州刺史であった。④⑦ 王恭を討伐した諸將はその一人である孫泰の道教に感化されていたわけである。ここに出てくる周繼は晉書五八の同名人とは別である（陳寅恪前掲）。王恭は風采すぐれ「真に神仙中の人」と評されたほか、なら道教と關係ない。この内戦は多少宗教戰爭の感がある。

④⑧ 奴を發し兵となすことは八王の亂のとき楊駿が行なつてから東晉ではしばしばある。錢儀吉「補晉兵志」（二十五史補編三冊）④⑨ 陳國符道藏源流考增訂版（一九六二）「帛和與帛家道」（二七六頁）ほか道藏割記の各項。

④⑩ 晉書四四・桓謙傳。同一〇〇・譙縱傳。宋書五一・臨川武烈王道規傳。